

子どもの本

研究会



35周年

子どもにおはなしを
本のたのしみを!

『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』 加藤陽子 朝日出版会

安田 晶子

熊本地震の避難所、校庭に広げたシートの上に寝転んでいました。昨日までと同じ空に雲が浮かんでいた。余震が人々の不安を煽っていた。でも生きている。私は支援が来ることを確信し、ふっと思いました。これが戦禍だったら、私たちはどうなってしまうのだろう。

第一次大戦後のパリ講和会議に出席した日本人は、パリの戦渦を見ました。けれども、そのころの日本人が切実に「総力戦とはこういうことかもしれない」と恐怖をリアルに感じたのは関東大震災だっただろうとこの本は論じています。現在の私たちも、天災の恐怖から戦渦を想像できるでしょうか。

熊本地震の後、私は漠然と不安を感じました。天災は避けられない。しかし人災は避けられる。そして疑問を持ちました。なぜ戦争はなくなるのか。このことを深く考えるためには私には知識が足りません。サザンオールスターズの歌『ピースとハイライト』に「教科書は現代史をやる前に時間切れ、そこが一番知りたいのに、何でそうなっちゃうの」という歌詞があります。『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』はこの知りたい部分を教えてくれる一冊でした。

意外にも暗く重い本ではありません。著者が、日清戦争から太平洋戦争までの時代について歴史学者の立場で事実の読み取り方をサバサバと語っています。歴史的にみて、一人の政治家の外交力で戦争を回避できるのです。

太平洋戦争の頃と現代では情報の量と伝達速度が違います。今の私たちに必要なのは、情報量というよりも、情報を読み解く能力でしょう。払った税金で我が子を戦争に送られるなんて理不尽です。私たち大人に出来るのは、ちゃんと考えて投票に行くことです。選挙が近づいています。誰に投票すべきなのか、その答えはこの本にはありません。けれども、その答えを考えるためのスキルを教えてください。本です。



(会員)